

美しい街を創り出す

イギリスのデザインガイド

石田富男

昨春秋、イギリスのデザインガイドを長年研究されている佐藤先生（中部大名誉教授）、松山先生（中部大准教授）等の視察に同行する機会を得た。日程の都合から参加したのは後半のバーミンガムとロンドン周辺だけであるが、それでも訪問先は多岐にわたる。その中からここでは Essex 州とバーミンガムのデザインガイドについて紹介したい。



Essex Ⅱ

イギリスのデザインガイドの先駆的役割を果たした Essex 州。一九七三年に発行されたデザインガイドにおいて、従来の慢性的デザインによる「退屈な郊外」という住宅地の形態を否定し、「クルドサク道路を原則とした囲み空間」を方針として打ち出した。

そのモデル的施行となったのが South woodham である。ここには直線道路に単調に住戸が配置された「退屈な郊外」もみることができ、その対比により魅力的な空間構成を体感できる。魅力的な空間を写真で紹介しておこう。



South woodham—最初のデザインガイドのモデル—

ここではクルドサクが多用されているが、一九八〇年代からイギリスの交通計画理念に変化が生まれる。クルドサク

クで構成された街はわかりにくく、防犯面で課題を有するという考え方が主流となり、新たに改訂された一九九七年版のデザインガイドでは、交通のペースアピリティ（行きやすさ）を強調し、不整形グリッドプランを中心とした非クルドサク道路体系が採用される。

この第二のデザインガイドの発効にあたって実験的施行が行われたのが Great Notly である。開発初期はクルドサクが主であったが、次第に不整形グリッドが使われるようになり、最後の開発ではクルドサクが姿を消す。



Great Notly —クルドサクの否定—

ここでの戸数密度は二〇〇〜三〇〇戸/haとイギリスで望ましいとされる五〇戸/haに届かない。新しいデザインガイド追加版（二〇〇七年発行）では高密度開

発について適用するためのものであり、そのモデルとされているのが Newhall である。写真からも高密度開発の状況が感じられよう。下の写真は Back-to-Back（背中あわせ住宅）。イギリス全土で一九三七年以降禁止されたものがこの開発で復活した。高密度開発を実現するためにはこうせざるを得なかったのだろうか。不思議な空間が生まれている。



Newhall —高密度開発のモデル—

バーミンガム

イギリス第二の人口を有する工業都市バーミンガム。一九八〇年代に新設居住のためのデザインガイドが作成されたが、その内容は住宅水準の確保、日照や採光、増築の制限など簡単なものであった。それが、Essex 州など先駆的取り組みをうけたイギリス政府の新たな都市デザイン政策の動向に対応し新たなデザインガイド（Paces for living）が二〇〇一年に制定された。これは郊外居住地を対象としたもので、公営住宅の再生事業において効果を発揮している。

Castle Vale は一九六〇年代に建設された市内最大規模の公営団地で、国の直轄事業として HAT(Housing Action Trusts) が担当した市内唯一の団地再生事業である。当初の団地形態は高層住宅と低層住宅との混合開発であったが、団地再生では高層住宅が完全に否定され、三十四棟あった高層住宅は高齢者住宅として改造された二棟を除いて解体・除却され、跡

地にはアーバンビレッジ様式の低層住宅が建設されている。



Castle Vale —高層住宅の跡地に建設された低層住宅—

Pyre Hayes は第一次大戦後に建設された公営住宅である。イギリスでは Right to buy 政策により公営住宅に三年以上居住している者はその住戸の払い下げを受ける権利が与えられる。市が公営住宅の再生に取り組みようとした場合に、これら持家層の賛同が得られなければ事業に踏み込めない。ここでは一九八九年に建て替えプログラムが作成されたが住民がまとまらなかった。デザインガイドを提示することで、再生後の具体的な街のあり方が周知され、事業着手にこぎつけたという。



Pyre Hayes —デザインガイドが建て替えを促進—

Lay Hill は第二次大戦直後に建設された公営住宅である。中層とテラスハウスという戦後の典型団地であったが老朽化が著しく建て替えが行われた。自然を取

り入れた空間構成に特徴があり、新しいデザインガイド Paces for living の五原則に沿ってデザインが行われている。



Lay Hill —Paces for living の 5 原則に沿ったデザイン—

Bournville は十九世紀末にチョコレート工場主ガドベリーが従業員のために開発したニュータウン。バーミンガム市が誇りとする田園都市のモデル（ガーデンビレッジ）である。Pyre Hayes や Lay Hill の外観デザインにもこのボーンビル様式が取り入れられている。住民もこの街に誇りを持っているようで見学に訪れた我々に自慢げに語りかけてきた。歴史の重みを感じる街である。



Bournville —ガーデンビレッジ—

今回の視察では現地に詳しい先生方のおかげで効率よく見て回ることができ、多くの美しい街に出会うことができた。見れば見るほど感じるのは日本の街の風景の貧困さだ。美しい街を創り出すデザインガイドに学ぶ必要がある。